

小学部研究

目 次

I 研究主題	21
II 研究主題設定の理由	
1 子供自身が「やりたい」と思っ て取り組み、成し遂げられた喜びを 「もっとやってみよう」と次への意欲につなげることができ るようにしたい	21
2 一人一人の子供が「やりたい、も っとやってみよう」と思える 生活単元学習にしたい	22
III 研究目的	24
IV 研究仮説	24
V 研究内容・方法	24
VI 研究の実際	
1 「やりたい、もっとやってみよう」と思える生活単元学習とは？	24
2 「やりたい、もっとやってみよう」と思える単元及び学習活動を考える	26
3 「やりたい、もっとやってみよう」と思える授業について考える	29
VII 実践事例 単元「附養まつりをしよう」の実践	
1 単元の見直し	30
2 目的意識・課題意識を持って取り組む学習活動の設定	32
3 活動の様子（全体的に）	34
4 授業の様子（ポップコーングループ）	35
5 成果と今後の課題	37
VIII 研究の成果と今後の課題	38

I 研究主題

一人一人の子供が「やりたい、もっとやってみよう」と思える
生活単元学習の取り組み

II 研究主題設定の理由

- 1 子供自身が「やりたい」と思って取り組み、成し遂げられた喜びを「もっとやってみよう」と次への意欲につなげることができるようにしたい

(1) 将来の豊かな生活につなげるために

小学部の教育は、義務教育の最初の6か年を、また、本校における12か年の一貫教育の最初の段階を受け持つことになり、中学部や高等部、さらには将来の豊かな生活に向けての基盤をしっかりと築いていく時期である。この学部としての位置付けを踏まえながら、将来の豊かな生活につながる指導内容や指導方法を考えるときに、小学部においては、「生活の基盤となる力」を身に付けることができるようにしていきたい。それはどのようなものであるか。

わたしたちは、小学部で大切にしたいことやそのための力を次のようにとらえた。

<小学部で大切にしたいこと>

子供たちがいろいろなことに興味・関心を持ち、
自分でやってみようとする意欲を伸ばしていくこと



【将来の豊かな生活の基盤】

自分のやりたいことに向かう力
ぶつかる課題に何とか立ち向かおうとする力

(2) 小学部の子供たちの主体的な姿から

それでは「自分のやりたいことに向かう力」や「ぶつかる課題に何とか立ち向かおうとする力」はどんな場面で見られるのだろうか。また、それはどのような姿だろうか。

子供たちは、興味・関心のある活動や遊びの場面において、自分の目的をしっかりと持ち、集中して取り組んだり、自ら課題に挑戦したりする様子が見られる。

このように、興味・関心のあるものや、何をするのか、どうすればよいのか分かるものに対しては、自分からやろうとしたり、自分なりに試行しながら活動を続けたりすることが

きる。ここに、わたしたちは指導の糸口や可能性を見出し研究の手掛かりがあると考えた。

そして、この姿を興味・関心のあるものだけにとどまらせず、将来の生活を考え、「その子にとって本当に必要な内容」を見極めるとともに、一人一人の子供が「1時間の授業から次の授業へ、今日から明日へ・・・と意欲的、主体的に過ごしていくこと」がまさに「将来の豊かな生活につながる」と考えた。

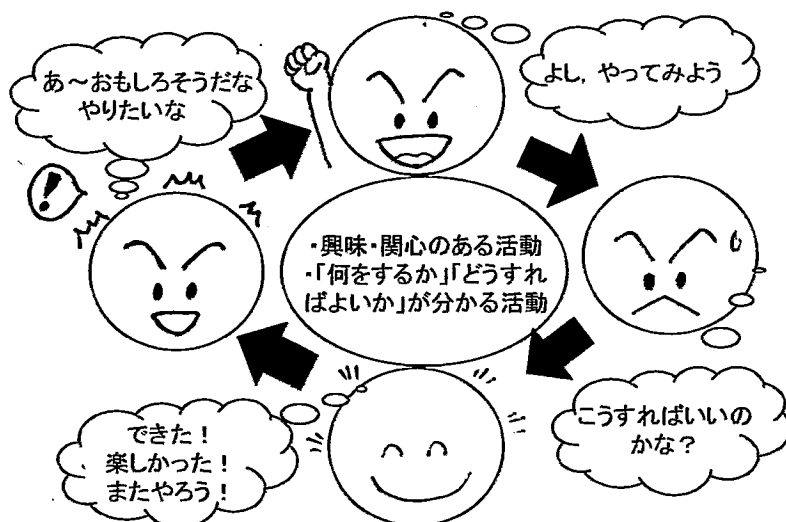


図1 主体的に取り組んでいる姿

子供自身が「やりたい」と思って取り組み、成し遂げられた喜びを「もっとやってみよう」という次への意欲につなげている姿

を、小学部の子供たちの「主体的な姿」ととらえ、研究を進めることにした。

2 一人一人の子供が「やりたい、もっとやってみよう」と思える生活単元学習にしたい

(1) なぜ、生活単元学習か？

知的障害児の教育において中核的な指導の形態である生活単元学習は、本校小学部においても学校生活の中心に位置付けられている。

生活単元学習とは？

「生活上の課題処理や問題解決のための一連の目的活動を組織的に経験させることによって、自立的な生活に必要な事柄を実際・総合的に学習させようとする指導の形態」(文部省, 1991)

「単なる知識や技能の習得が目的ではない。その子なりに精一杯環境に働き掛け、当面する課題に立ち向かっていく主体的なたくましさをも身に付けていくこと」が生活単元学習の主目的である。(高野, 1994)

「生活単元学習によりよく取り組めば、結果として子供たちは生活していく力、生きていく力をより確かにしていく」(石川, 1997)

そこで、現在の生活単元学習の指導を見直し、充実させることが子供の現在の生活を充実さ

せるとともに、将来の豊かな生活につながるものと考え、生活単元学習に取り組むことにした。

生活単元学習の充実を目指し、「将来の豊かな生活」につなげたい

(2) 生活単元学習の充実に向けて

生活単元学習における実践課題から（実践課題の分析，焦点化）

— < 中心的な実践課題 > —

- ・ 一人一人の単元内での成果が見えにくい
- ・ 「させられる」授業になりがちである



— < 実践課題の分析 > —

- ・ 一人一人に適した指導課題の設定ができていないのではないか
- ・ 子供が「何をするのか」「どうすればよいのか」、目的意識や課題意識を明確に持っていないのではないか



— < 焦点化 > —

- ・ その子にとって本当に必要な内容を見極め、指導課題を明確にする必要性
- ・ 子供自身が目的を持ち、学習課題を意識できるような内容や指導方法を考える必要性



- ・ 将来の豊かな生活につながる、その子にとって本当に必要な内容を見極め、指導課題を明確にして取り組むことはまさに「教育的ニーズにこたえる」ことである。
- ・ 子供自身が「目的意識・課題意識」を持って取り組める内容や方法を考えることで主体的に取り組む生活単元学習にしたい。

つまり、教育的ニーズにこたえとともに、子供自身が目的意識・課題意識を持って取り組める内容や指導方法を考え、

一人一人の子供が「やりたい、もっとやってみよう」
と思える生活単元学習にしたい

Ⅲ 研究目的

- 一人一人の子供が「やりたい、もっとやってみよう」と思える生活単元学習の単元や学習活動の設定はどうあればよいかを明らかにする。
- 一人一人の子供が「やりたい、もっとやってみよう」と思って取り組める授業はどうあればよいかを実践を通して明らかにする。

Ⅳ 研究仮説

- 現行の指導計画を、教育的ニーズから精選するとともに、「目的意識・課題意識」を持って取り組める単元や学習活動として設定していくことにより、一人一人の子供が「やりたい、もっとやってみよう」と思える生活単元学習になるのではないか。
- 一人一人の子供が目的意識・課題意識を持って取り組めるような支援の在り方を考え、授業改善を図ることにより、子供たちが「やりたい、もっとやってみよう」と思える授業になるのではないか。

Ⅴ 研究内容・方法

- 「やりたい、もっとやってみよう」と思える生活単元学習の内容を考える。
 - ・ 生活単元学習に関連する個々の教育的ニーズを把握する。
 - ・ 一人一人の教育的ニーズから生活単元学習で必要とされる内容を導き出す。
 - ・ 教育的ニーズを踏まえ、子供自身が「目的意識・課題意識」を持って取り組む単元及び学習活動として設定するための考え方や手順を探る。
- 「やりたい、もっとやってみよう」と思って取り組める授業の支援の在り方を探る。
 - ・ 授業において子供が「目的意識・課題意識」を持つことができるためにはどのような支援が大切かを探る。

Ⅵ 研究の実際

1 「やりたい、もっとやってみよう」と思える生活単元学習とは？

「やりたい、もっとやってみよう」と思える生活単元学習とは、
教育的ニーズにこたえ、目的意識・課題意識を持って取り組める生活単元学習である

(1) 教育的ニーズにこたえる生活単元学習

生活単元学習は、子供の実際の生活より発展し、興味・関心に基づいた内容や活動で構成される。今回の研究では、この内容をさらに「教育的ニーズにこたえる」という視点で見直したり、精選したりし、単元や学習活動を再考したいと考えた。

ここで、生活単元学習を指導の場として挙げられた一人一人の教育的ニーズ（生活単元学習に関連する教育的ニーズ）と、それらを分析し、まとめたもの（生活単元学習で必要とされる内容）は次のとおりである。

表1 生活単元学習に関連する教育的ニーズと生活単元学習で必要とされる内容

	生活単元学習に関連する教育的ニーズ	生活単元学習で必要とされる内容
身体・運動	<ul style="list-style-type: none"> ・身体知覚 ・運動企画 ・目と手の協応（指先を使う，操作，注視） ・体力 	<p>ア 感覚に働き掛けたり，体全体を動かしたりする内容</p> <p>イ 操作したり，指先を使ったりしてものにかかわるような内容</p>
情緒・行動・社会性	<ul style="list-style-type: none"> ・自己コントロール力（場面や状況の理解，自己選択・判断・決定，行動の善悪，望ましい行動の形成） ・集団行動 ・集団意識 ・役割 ・活動の手順，流れの理解 ・社会的ルール 	<p>ウ 集団活動を通して，集団を意識したり，集団行動に慣れたりすることができるような内容</p> <p>エ 活動への見通しを持ち，自分で考えたり，選択・決定したりして活動することができるような内容</p>
生活能力	<ul style="list-style-type: none"> ・生活リズム ・生活経験（買物，乗り物の利用，調理，交通安全，電話） 	<p>オ 生活経験を広げるような内容（買物，調理，乗り物の利用，電話など）</p>
遊び・余暇活動	<ul style="list-style-type: none"> ・遊びの経験，遊びの広がり 教師や友達と一緒にの遊び，やりとり遊び，体を使った遊び，いろいろな素材やものにかかわる遊び，簡単なルールのある遊び，興味のある遊び，集団遊び ・余暇の充実，拡大 	<p>カ いろいろな遊びを楽しむような内容</p>
コミュニケーション	<ul style="list-style-type: none"> ・人やものへのかかわり，他からの刺激の受け入れ，共感的コミュニケーション ・大人との関係，対人意識 ・伝達手段の獲得 ・要求行動の拡大，伝達成功経験による意欲の高まり ・指示理解 ・電話対応，発表経験 	<p>キ 人やものにかかわりながら，要求や気持ち，考えなどを自分なりの方法で伝えたり，発表したりするような内容</p>
働く力	<ul style="list-style-type: none"> ・役割の自覚，仕事内容の理解 ・仕事の継続，働く意欲 ・家事への興味・関心，知識・技能の習得，拡大 	<p>ク 自分の仕事（役割）に継続して取り組んだり，お手伝いをしたりするような内容</p>

(2) 「目的意識・課題意識」を持って取り組む生活単元学習

子供自身が「やりたい，もっとやってみよう」と主体的に取り組む単元や学習活動にするために，子供自身が「何をするか」分かって取り組み，「こうすればいいかな」「こうしてみよう」と考え，試行する場面を望みたい。そこで，わたしたちは，「目的意識・課題意識」の部分に着目し，教育的ニーズに挙げられた内容を，更に「目的意識・課題意識」の持てる学習活動として設定していくことで，「やりたい，もっとやってみよう」と思える生活単元学習になるのではないかと考えた。

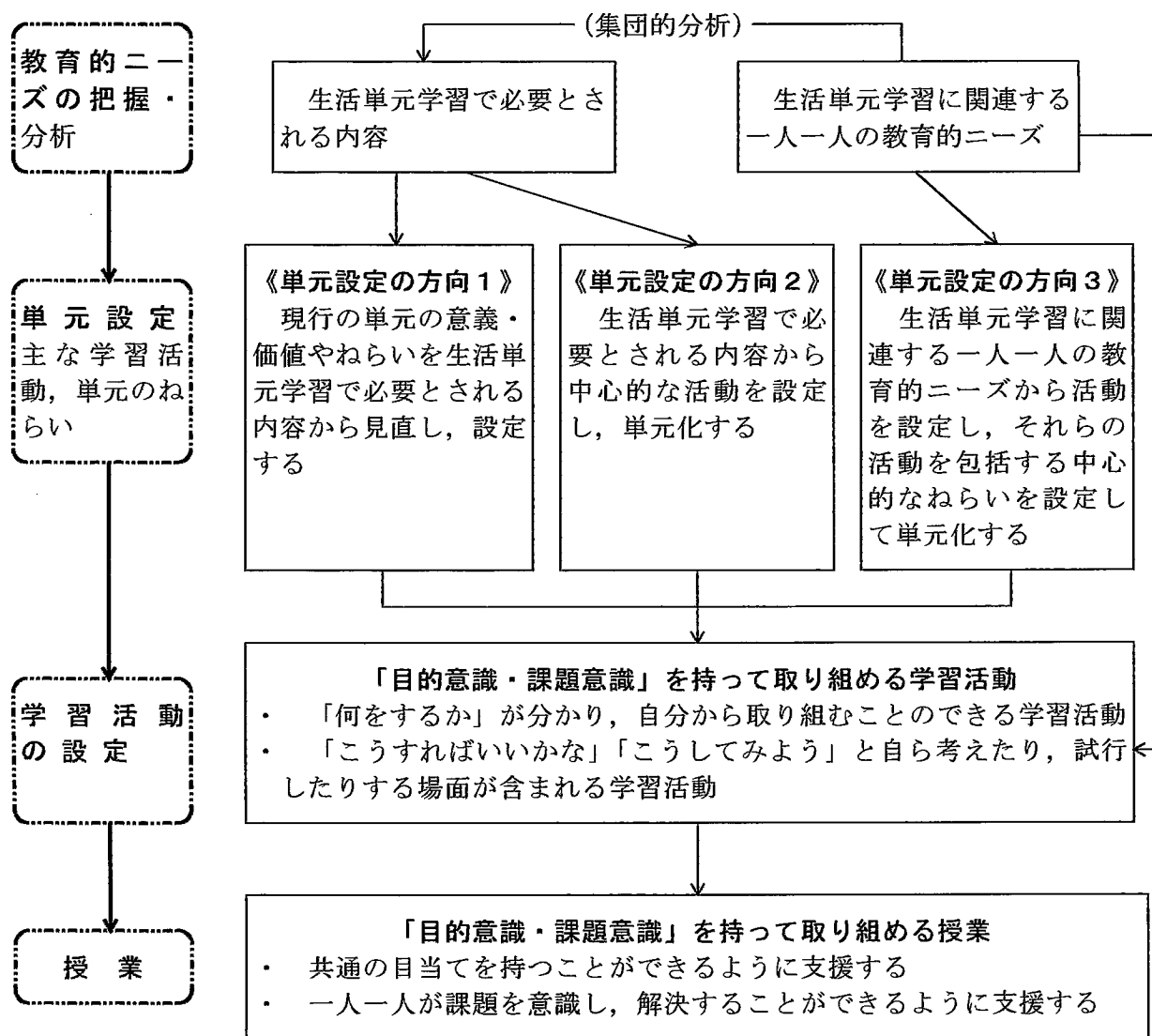


図2 「やりたい、もっとやってみよう」と思える生活単元学習

2 「やりたい、もっとやってみよう」と思える単元及び学習活動を考える

(1) 単元の設定

子供たちが「やりたい、もっとやってみよう」と思える生活単元学習の単元及び中心的な活動の設定に当たっては、以下のような三つの方向を考え、それに沿って現行の単元や学習活動を見直し、設定していくことにした。そして、現行の単元では教育的ニーズに対応できない場合は、新たに単元を設定したいと考えた。

ア 単元設定の方向1

現行の単元の意義・価値やねらいを生活単元学習で必要とされる内容で見直し、設定する

現行の指導計画にある行事単元については、この方向で見直ししていく。単元の意義・価値

やねらいと「生活単元学習で必要とされる内容」を照らし合わせ、教育的ニーズにこたえられるものか検討する。

このように現行の単元を見直した結果、その単元が本当に必要かどうか、単元名は適切かどうかという見直しができる場合もある。

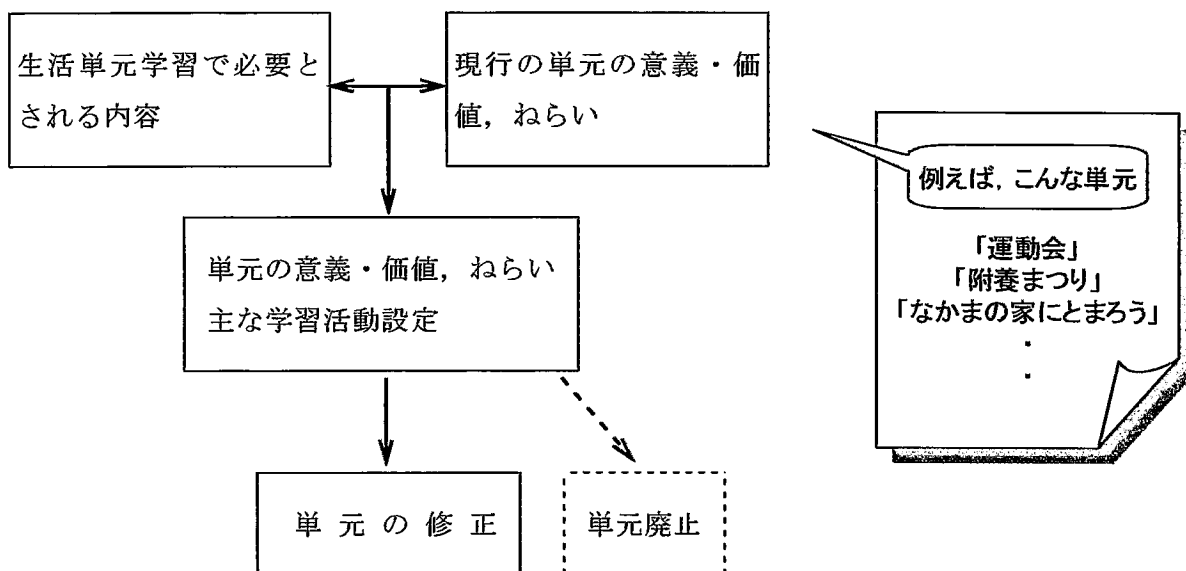


図3 単元設定の方向1

イ 単元設定の方向2

生活単元学習で必要とされる内容から中心的な活動を設定し、単元化する

教育的ニーズの集団的な分析から導き出した、「生活単元学習で必要とされる内容」を積極的に単元化する方向である。特に、生活単元学習で必要とされる内容の「オ 生活経験を広げるような内容（買物、調理、乗り物の利用、電話など）」と、「カ いろいろな遊びを楽しむような内容」は教育的ニーズとして多く挙げられており、今後学習内容として積極的に取り上げていきたいと考える。

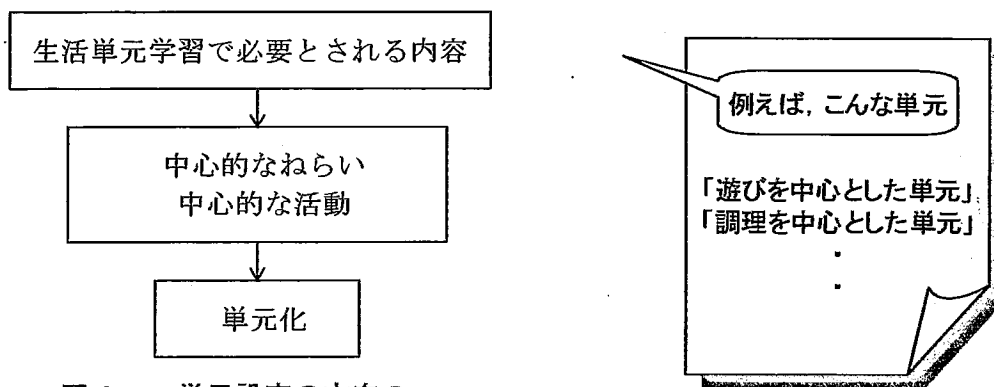


図4 単元設定の方向2

ウ 単元設定の方向3

生活単元学習に関連する一人一人の教育的ニーズから活動を設定し、それらの活動を包括する中心的なねらいを設定して単元化する

より一人一人の教育的ニーズにこたえるための単元設定の方向である。年度当初は「X単元」としておき、教育的ニーズより学習集団を編成して行っていきたいと考える。

(生活単元学習に関連する一人一人の教育的ニーズ)

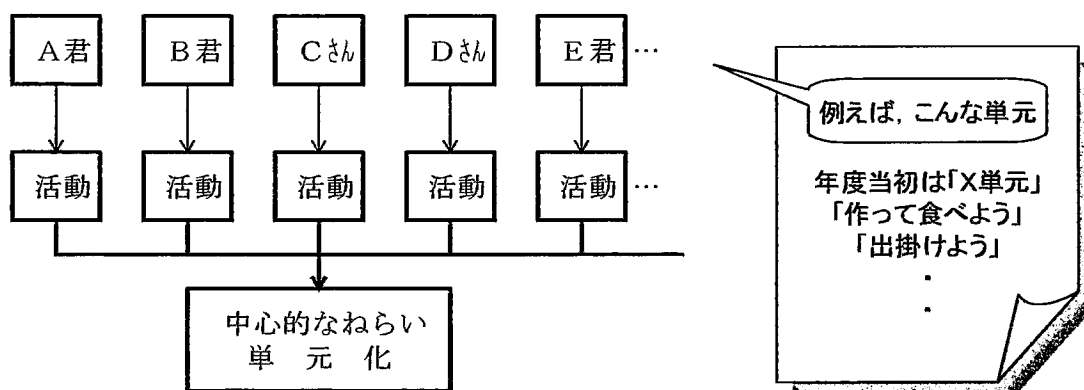


図5 単元設定の方向3

(2) 学習活動の設定

単元のねらいを達成するために必要な学習活動を設定する際、「やりたい、もっとやってみよう」と思える単元にするために、わたしたちはさらに「生活単元学習に関連する一人一人の教育的ニーズ」に関連付けるとともに、「目的意識・課題意識」を持って取り組める学習活動を設定していきたいと考える。

では、「目的意識・課題意識」を持って取り組める学習活動とはどのようなものだろうか。また、具体的にはどのような学習活動を用意すればいいのだろうか。

表2 「目的意識・課題意識」を持って取り組める学習活動

	学 習 活 動	具 体 的 な 学 習 活 動
目 的 意 識	「何をするか」が分かり、自分から取り組むことのできる学習活動	<ul style="list-style-type: none"> ・ 子供の興味・関心に基づいた、「何をするか」分かりやすい活動 ・ 好奇心・探求心をかき立て、興味・関心を広げられるような活動 ・ 直接的・体験的活動
課 題 意 識	「こうすればいいかな」「こうしてみよう」と自ら考えたり、試行したりする場面が含まれる学習活動	<ul style="list-style-type: none"> ・ 一人一人に適した課題（もう少しで達成できそうなもの）を含んだ活動 ・ 「子供のできること」を生かした活動 ・ 「もう少しでできる」活動

以上のようなことから、「目的意識・課題意識」を持って取り組む学習活動にするために、

- ・ 「何をするか」分かりやすく、シンプルにする（精選する）こと
- ・ 直接的・体験的活動を多く取り入れること
- ・ 子供の興味・関心に基づきながら、好奇心・探求心をかき立てる活動を用意すること
- ・ 子供が考え、試行する場面のある活動を用意すること

を特に重視したいと考えた。

また、より「目的意識・課題意識」を持って学習活動に取り組めるように、教育的ニーズを基に学習集団を編成していきたい。

3 「やりたい、もっとやってみよう」と思える授業について考える

(1) 「やりたい、もっとやってみよう」と思える授業とは？

「やりたい、もっとやってみよう」と思える授業とは？



子供が目的意識を持って授業に臨み、自ら課題に向かい、自分で考えたり試行したりして課題解決の努力をし、満足感・成就感を味わえる授業、そして繰り返し活動を楽しんだり、次への意欲を高めたりすることができる授業

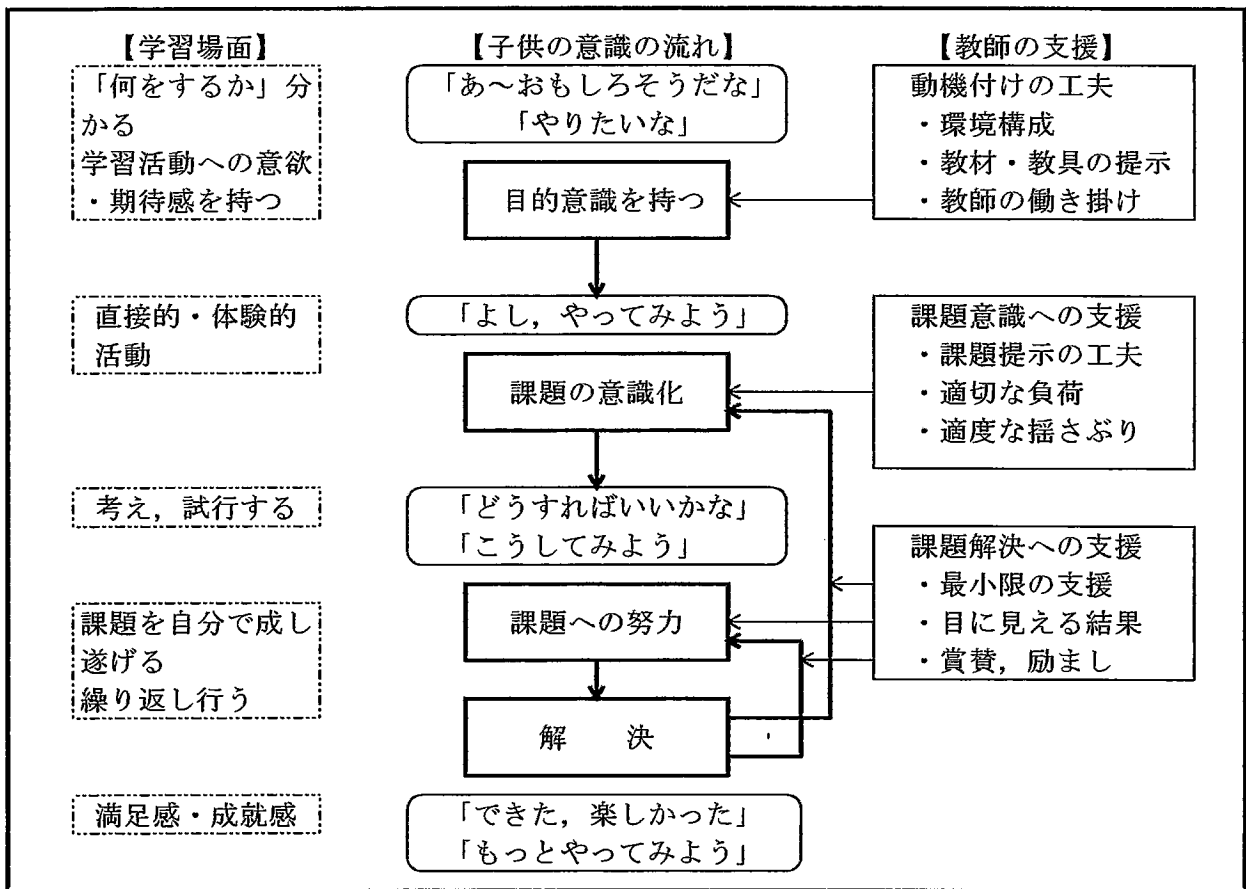


図6 「目的意識・課題意識」を持って取り組む授業の構造図

(2) 「目的意識・課題意識」が持てる支援の在り方

わたしたち教師は、子供たちと共に生活単元学習の活動に取り組みながら、良きパートナーとして支援したい。さらに、子供たちが「目的意識・課題意識」を持てるような支援を工夫していきたいと考える。そのために、以下のような観点で支援の在り方を検討した。

表3 「目的意識・課題意識」を持てるような支援の観点と支援の在り方

支援の観点	具体的な支援の在り方
共通のめあてをもつことができるようにする支援	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「やりたい」と思えるような動機付けの工夫 <ul style="list-style-type: none"> ・ 「何をするか」が見て分かるような環境構成 ・ 子供の注意を引くような教材・教具の提示 ・ 「何をするか」気付くことができるような教師の働き掛け ・ 直接見たり、やってみたりする活動の設定
一人一人が課題を意識し、解決することができるようにする支援	<ul style="list-style-type: none"> ○ 一人一人に応じた課題の提示の工夫 <ul style="list-style-type: none"> ・ 言葉掛け、写真カードの提示、直接体験するなど段階的な支援 ・ 簡単にできるものではなく、強い動機付けとともに「もう少しでできる」状況を設定する（適切な負荷を与える） ・ 必要な物がない状況などを作る（適度な揺さぶり） ○ 一人一人が課題解決のために努力し、繰り返し取り組むような支援の工夫 <ul style="list-style-type: none"> ・ 「こうすればいいかな」「こうしてみよう」と考え、試行する状態を可能な限り見守ったり、必要最小限の支援にとどめたりする ・ 結果や終わりが子供自身に分かるような活動の工夫 ・ 子供自身が「できた」という満足感・成就感を持つことができるような支援 ・ 「また、やってみよう」と思うような賞賛、励まし

VII 実践事例 単元「附養まつりをしよう」の実践

単元設定の方向1

現行の単元の意義・価値やねらいを生活単元学習で必要とされる内容で見直し、設定する。



1 単元の見直し

(1) 教育的ニーズにこたえられる単元であるか検討する

現行の単元（「附養まつり」）の意義・価値やねらいと「生活単元学習で必要とされる内容」を照らし合わせ、教育的ニーズにこたえられるものか検討する。

意義・価値

- みこしパレードや出店での売り買いなど子供たちの興味・関心のある活動を楽しむことができる行事である。
- みこしや出店で売るものを作るなど作る活動が設定できる。
- 自分たちで作ったものを売り買いする活動を通して、人とやり取りをすることができる。



ねらい

[低学年]	[中学年]	[高学年]
<ul style="list-style-type: none">・ 教師や友達と一緒に作ったり、作ったもので活動したりする。・ 祭りに楽しく参加する。	<ul style="list-style-type: none">・ 教師や友達と一緒に作りたいものを決めて作り、それを使って楽しく活動する。・ 祭りをしようとする態度を育てる。	<ul style="list-style-type: none">・ 役割を分担し、協力して作り、それを使って楽しく活動する。・ みんなで祭りをしようとする態度を育てる。



《学習活動》

- ・ みこし作り
- ・ みこしパレードの練習
- ・ 出店で売る品物作り
- ・ 出店作り
- ・ お店やさんごっこ

これら単元の意義・価値やねらいは、「生活単元学習で必要とされる内容」の「イ 操作したり、指先を使ったりしてものにかかわるような内容」「エ 生活経験を広げるような内容」「カ人やものとかかわりながら、要求や気持ち、考えなどを自分なりの方法で伝えたり、発表したりするような内容」「キ 自分の仕事（役割）に継続して取り組んだり、お手伝いをしたりするような内容」が含まれており、教育的ニーズにこたえられる単元であると言える。

(2) 目的意識・課題意識を持てる学習活動という視点と子供の実態、これまでの「附養まつり」単元の反省から

ア 「附養まつり」単元の反省から

- 学習活動がいくつかあり、附養まつりの単元で何をするのかが子供にとって分かりにくかったのではないか。
- 直接的・体験的活動や実際的な活動が少なく、まつり当日までの見通しを持った主体的な活動が見られなかったのではないか



今回の「附養まつり」単元では
学習活動を精選し、直接的・体験的活動を多く取り入れ、分かりやすくしたい。

イ 子供の実態から

小学部の子供たちの実態から、作ったものを売るということまで見通しを持って活動することが難しくなっている。

そこで、(1)、(2)を踏まえて以下のようなねらいに変更し、学習活動の見直しをすることで子供たちが「やりたい、もっとやってみよう」と思える単元「附養まつりをしよう」になるのではないかと考えた。

ねらい

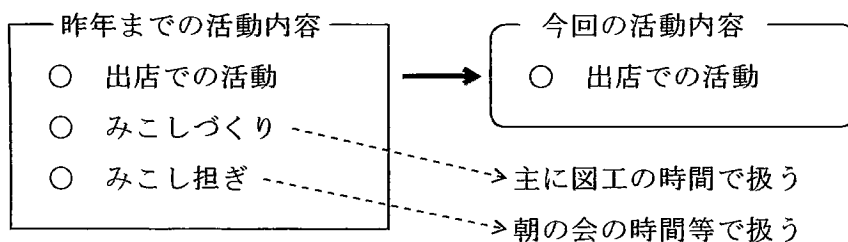
- 祭り当日と同じ直接的・体験的活動を繰り返すことによって、活動に対する見通しが持てるようにする。
- 教師や友達と一緒に活動することによって、かかわり合いを深められるようにする。

2 目的意識・課題意識を持って取り組む学習活動の設定

(1) 学習活動設定の工夫

【シンプルで分かりやすい活動内容に】

子供にとって分かりやすい活動にするために、活動内容を以下のように精選した。また、それぞれの出店でも子供にとって分かりやすくなるように活動を絞り込んだ。



(2) 指導計画の作成

次	主な学習活動・内容
	【全体での活動】
1	教師が売り手になり、まつりごっこをする。
一	・ 出店の紹介を見聞きする。

子供たちが「附養まつり」の活動に対して「自分もやりたい」という強い動機付けができるようにしたい。そのために、あらかじめプレイルームに出店を設置しておき、実際の出店の活動（買物）を自由に体験できるようにする。

	<ul style="list-style-type: none"> ・ お客になって自由に買物をする。 ・ 自分が活動したい出店の選択・決定 	
二	<p>【グループ別の活動】</p> <p>2 各出店ごとに活動する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ポップコーンや ・ くじ引きや ・ カラオケや 	<p>グループ別に活動することによって一人一人の教育的ニーズによりこたえられるようにしたい。また、各グループの活動の導入では、ポップコーンがはじける様子を見る、カラオケで好きな歌を歌ってみるなどの直接的・体験的活動をすることによって、子供が何をするのか分かりやすくする。</p>
三	<p>【全体での活動】</p> <p>3 まつりごっこをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 売り手と買い手に分かれ、まつりごっこをする。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>附養まつりに参加する。</p> </div>	<p>品物が不足するなどの状況を設定することによって課題意識を持つことができるようにする。</p> <p>全体でまつりごっこの活動を附養まつり当日と同じ形で行うことによって、まつり当日へ向けての見通しが持てるようにしたい。また、実際に附養まつりに参加し、多くの人とやり取りをしたり、買物をしたりすることによって「できた」という満足感・成就感を味わえるようにしたい。</p>
四	<p>【全体での活動】</p> <p>4 附養まつりを振り返る。</p>	<p>VTRを見たり、楽しかった活動をもう一度やってみたりして、活動を振り返るようにする。</p>

(3) 学習形態の工夫

本単元は、これまで学級ごとに取り組んできたが、今回は、グループ別（出店ごと）の活動を取り入れた。その理由は、以下のとおりである。

- 子供が、興味・関心を持ち、自分のできることを生かせる活動のある出店での活動に取り組むことによってより意欲的、主体的に活動できる。
- 教育的ニーズを基にグループ編成することで、一人一人の教育的ニーズにこたえやすくなる。
- 学級の枠を越えた新しいかかわり合いができる。

なお、各グループでは主に以下のようなことをねらった。

ポップコーンや：ポップコーン作りというやや手順の多い活動に見通しを持つことができる。

くじ引きや：くじ引きで引いたボールと同じ色のビンのお菓子を渡す活動に見通しを持つことができる。

カラオケや：カラオケの活動自体を繰り返し行い、「自分は、カラオケやの活動をするんだ」という見通しを持つことができる。

3 活動の様子（全体的に）

(1) 一次：導入、まつりごっこ

子供たちは、各出店の紹介を見聞きした後に自分の好きな店に自由に行って買物をした。ポップコーンができる様子を見て、自ら袋詰めしたり、くじ引きやで手をたたきながら「いらっしやい、いらっしやい」と言ったりするなど自分から各出店の活動に参加する様子も見られた。



ポップコーン，早くできないかな

(2) 二次：グループ別の活動

○ ポップコーンや

- ・ 活動の流れやポップコーン作りの分担を写真カードを使って提示し、視覚的にとらえやすくするとともに場の設定を分かりやすくすることによって子供たちが見通しを持って取り組めるようにしたところ、自ら袋の口にモールを巻くなど主体的に取り組む様子が見られた。
- ・ なべの中のポップコーンがなくなったときにどうするかというような課題解決場面を設定することによって、子供が自分で考えて行動する場面も見られた。



ポップコーン作り流れと分担

○ カラオケや

- ・ カラオケが子供の興味・関心のあるものであったことと、繰り返し行ったことで「カラオケをする」という目的を持ち、日ごろなかなか自分の好きなものを伝えようとしない子供が、好きな曲を毎回指さしで伝えるようになった。
- ・ カラオケの機器操作を写真カードで提示したり、手順を示したりするとともに毎回繰り返して取り組むことにより、自分で考えて操作するなど課題意識を持って取り組めるようになった。

○ **くじ引きや**

- ・ 活動を子供の課題に応じてジュースを渡す係、くじ引きの係、店の宣伝係の三つの係を分担して行ったところ、子供たちが自分から活動する姿が見られた。
- ・ 品物を並べていない状態から活動を始めたところ、自分たちで店の準備をする様子が見られた。

(3) 三次：まつりごっこ（全体）

活動の回数が少なかったこともあり、子供にとっては、売り手と買い手（お客）の役を交代しながら活動するということが十分理解されないまま活動することになってしまった。

4 授業の様子（ポップコーングループ）

(1) 授業構成の工夫

ア 目的意識を持てるようにするために

子供たちが、これから何をするのか分かりやすくし、活動したいという気持ちを持つことができるようにするために、導入でポップコーンができる様子を見たり、なべに入れたりするという直接的・体験的な活動を取り入れた。

イ 課題意識を持てるようにするために

一人一人の子供が自分に何ができそうか考えたり、試行したりすることができるようにするためにポップコーン作りの手順カードを示して次に何をするのか考える場面や、なべの中にポップコーンがないという状況を設定した。

(2) 支援について

授業における具体的な支援について、A児に焦点を当てて授業分析を行った。

○ 対象児：A児（1年生）

【生活単元学習に関連する教育的ニーズ】

- ・ 大人を中心にかかわりを受け入れること。
- ・ 遊びの中でいろいろな素材に触れたり、物にかかわったりすること。
- ・ 体験的学習を通して、できる喜びを味わうこと。

【単元の個人目標】

- ・ ポップコーン作りの過程で教師からの言葉掛けを受け入れたり、友達の様子を見たりして、教師や友達と一緒に活動することができる。
- ・ ポップコーンをすくって袋に入れる→袋を箱に並べるなど、ポップコーン作りの過程の一部に自分から取り組むことができる。



上手に入れられるかな

【本時の個人目標】

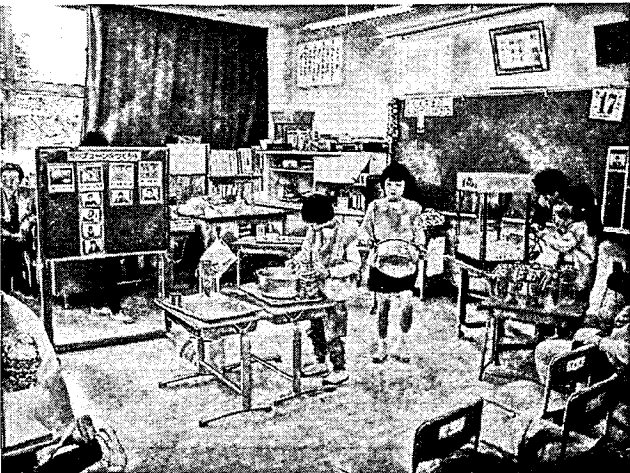
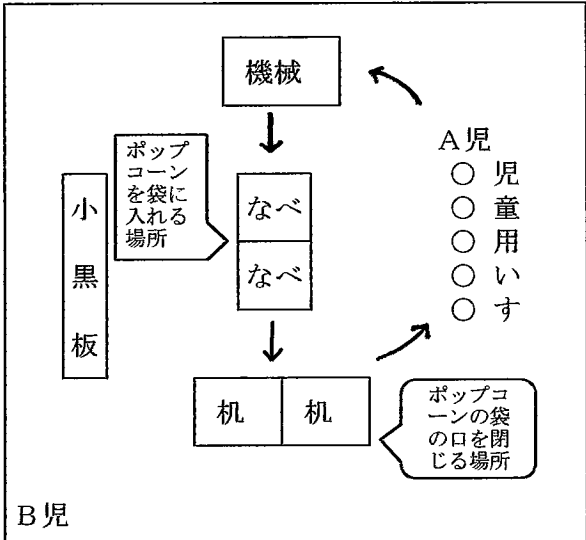
- ・ 教師の言葉掛けを受け入れて袋の付いたペットボトルを持つ→なべの中のポップコーンをすくって袋に入れる→B児に渡す活動に一人で取り組むことができる。

【共通の目当てを持てるようにするための支援】

支援とA児の様子	支援の意図
<p>○ 導入時：ポップコーンができる様子を見る場面</p> <p>中にポップコーンが入った機械に布を掛けて隠しておく。</p> <p>・ 離席したり、ほかの方を向いていたりする。</p> <p>「あー なんだか聞こえてきたよ。せーのパッ」(布を取り去る)</p> <p>・ 前を振り向く。ポップコーンを見ている。</p> <p>「ほら、ポップコーン。おいで。」(身振り)</p> <p>・ 席を立ち、ポップコーンへ近づく。</p> <p>・ ポップコーンが見えやすい機械の前方へ移動する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 豆がはじける様子（においや音）を見せる状況を設定しておくことによって子供たちが、「ポップコーンを作りたい」という気持ちや、「今日はポップコーンを作るんだ」という目的意識を持てるようにする。 機械を隠しておいた布を取り去ることによってポップコーンへの興味を引くようにする。 身振りや言葉掛けを行うことによって豆のはじける音やにおいに気付くことができるようにする。 子供に注意喚起を促すとともに子供の期待感と意欲を高めるためにポップコーンのできる様子や子供の気持ちの言語化や身体表現をする。
<p>【考察】</p> <ul style="list-style-type: none"> ポップコーンができる様子を見たり、なべに入れるという実際の活動を最初に設定したことによりA児もポップコーンの方へ視線を向けたり、自分から近づいたりする様子が見られるなど「今日は、ポップコーン作りをするんだ」という目的意識が持てたのではないかと考えられる。 	

⋮ : 環境設定 □ : 教師の働き掛け

【一人一人が課題を意識し、解決することができるようにするための支援】

支援とA児の様子	支援の意図
<p>○ ポップコーンを袋に入れ、B児に渡す場面</p> <p>ポップコーン作りの工程に沿って、機械→袋にポップコーンを入れる場所→袋の口を閉じる場所を配置しておく。</p>  <p>(1回目)</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分から袋詰めする場所に行ってポップコーンが運ばれてくるのを待っている。 	<ul style="list-style-type: none"> ポップコーンを製品にするまでの流れに沿って場を設定しておくことで子供に流れが分かりやすいようにする。  <p>B児</p> <p>場の設定</p>

<ul style="list-style-type: none"> 自分でポップコーンを袋に入れる。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>A児の背中に手を添え、袋の口を閉じる場所まで付いて行く。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> C児と交代し、いすに座る。 	<ul style="list-style-type: none"> A児の背中に軽く手を添えることによって自分で渡すということが意識できるようにする。
<p>(2回目)</p> <ul style="list-style-type: none"> C児が、袋に入れ終わり袋詰め場所が空いたのを見て近づき、ポップコーンを袋に入れる。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>袋一杯に入れたのを見て、A児に袋を渡す。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> 袋を持って自分でB児に渡しに行く。 	<ul style="list-style-type: none"> ポップコーンの入った袋を渡すことで袋が一杯になったこととB児に渡し、袋の口を閉じてもらうことが分かるようにする。
<p>【考察】</p> <ul style="list-style-type: none"> 導入で目的意識を持たせたために自分からポップコーンの方に向かい、袋に入れる様子が見られた。ポップコーンを袋にどのくらい入れたら一杯になり、終わりなのか分かりにくく、教材・教具の工夫が必要だった。また、袋一杯になったら次にどうするのか説明していなかったため、A児にとって見通しが持ちにくくなってしまったのではないかと考える。 2回目は、袋一杯になった後、袋を渡すと自分で考えてB児に渡しに行く姿が見られるなど、課題意識が持てたのではないかと考える。 	

⋯⋯: 環境設定 □: 教師の働き掛け

【評価】 自分からポップコーンを袋に入れたり、次の子供に渡したりするなど自分から活動する様子が見られた。これは、教師の言葉掛けなどを本児が受け入れたことや自分にもポップコーンを袋に入れることができた喜びを味わえたということであり、「大人を中心にかかわりを受け入れること」「体験的学習を通してできる喜びを味わうこと」という本児の生活単元学習に関連する教育的ニーズにこたえることができたのではないかと考える。

5 成果と今後の課題

○ 目的意識・課題意識を持って取り組める単元や学習活動の設定について

【目的意識を持てる単元や学習活動の設定という視点から】

- 子供たちが、興味・関心のあるポップコーンを袋に入れる、カラオケで歌ってみる、くじ引きをするなどの直接的・体験的な活動から、学習活動を始めたことによって子供たちの「自分もやりたい」という期待感や意欲が高まり、自分から好きな出店に向かう姿が見られた。
- 単元の導入時から出店を設置したことによって、「附養まつりをしよう」の単元では、「出店で活動をするんだ」ということが分かりやすくなった。

【課題意識を持てる単元や学習活動の設定という視点から】

- 一人一人の子供の「附養まつりをしよう」の出店に対する興味・関心や生活単元学習に関連する教育的ニーズを基に学習集団の編成（グループ編成）を行い、一人一人の課題を明確にしたことによって自分で考えて活動するなど意欲的、主体的な子供の姿が見られた。

○ 授業において目的意識・課題意識を持って取り組むための支援について

【目的意識を持って取り組むための支援という視点から】

- ・ ぱっと見て「何をするか」分かる環境構成にするために出店を設置したところ、子供たちは好きな店に自分から向かう姿が見られた。
- ・ 視覚的な手掛かり（写真，絵など）や直接的・体験的活動（カラオケで歌うなど）といったより具体的な活動を取り入れることによって、何をするか子供に分かりやすくなった。

【課題意識を持って取り組むための支援という視点から】

- ・ 一人一人の子供の課題に合わせて活動を設定し、その子供のできることを生かしながら、もう少しでできそうなことは、子供が自分で考えて行動できるように配慮することによって、その子なりに考えて行動する姿が見られた。

○ 今後の課題

- ・ 単元のねらいの十分な吟味を行い、学習活動の設定を行うこと。
- ・ 個々の課題の明確化（その子供のできることももう少しでできそうなことの吟味）を行い、課題解決ができるような支援の在り方について検討すること。

VIII 研究の成果と今後の課題

○ 一人一人の子供が「やりたい、もっとやってみよう」と思える生活単元学習の単元や学習活動の設定について

《研究の成果》

- ・ 「附養まつり」の単元において、「生活単元学習で必要とされる内容」と単元の意義・価値の照合を行うことにより、単元の見直しをすることができ、生活単元学習に関連する教育的ニーズにこたえる単元の設定ができた。
- ・ 「附養まつり」の単元において、一人一人の子供の興味・関心や生活単元学習に関連する教育的ニーズを基に、学習活動を精選したり、学習集団を考慮したりすることで、子供自身が「やりたい、もっとやってみよう」と自らの力を発揮し、主体的に取り組む姿が見られた。
- ・ また、教師同士で一人一人の子供の課題や一人一人に応じた支援について話し合い、共通理解して実践することができた。

《今後の課題》

- ・ 単元設定の方向として三つ挙げて理論で述べているが、それぞれの考え方についてはまだ実践の段階で十分な検証が行えていない。今後明らかにしていきたい。
- ・ 単元や学習活動設定の考え方や手順に基づき、指導計画作成に当たっての考え方を明らかにし、年間指導計画を作成していきたい。

○ 一人一人の子供が「やりたい、もっとやってみよう」と思える支援の在り方について

《研究の成果》

- ・ 「目的意識・課題意識」という観点に絞って授業を見直すことにより、教師が授業におけるポイントを踏まえて実践することができた。
- ・ 子供自身が「目的意識・課題意識」を持つことの大事さを理論を通して共通理解することで、子供を主体とした、より支援的な教師の働き掛けについて考えることができた。
- ・ 授業の中で直接的・体験的な活動を多く取り入れることや動機付けへの働き掛けの重要性を認識し、日ごろの授業実践で生かすことができた。

《今後の課題》

- ・ 「附養まつり」の単元ではグループ編成して行い、一人一人の支援についても検討してきたが、やはり学級外の子供についての支援を戸惑うという反省が聞かれた。今後も十分に一人一人の支援について話し合いを行い、適切な支援の在り方を探っていききたい。
- ・ 一人一人の子供の課題の明確化とそれに対する適切な支援→評価→課題の修正→新たな課題の設定といった、1時間ごとの課題の設定と授業の評価については十分に行えているとは言い難い。今後も実践、検討、評価を重ね、目指す授業像に近づけていききたい。

○ その他

- ・ 個別の指導計画作成を行い、一人一人の課題や学習活動、一人一人に応じた支援について明らかにしていきたい。
- ・ 生活単元学習の目標設定を保護者と話し合いを持ちながら設定し、家庭と連携して取り組めるようにしていきたい。

引用・参考文献

《引用文献》

文部省(1991)：特殊教育諸学校 小学部・中学部学習指導要領解説－養護学校（精神薄弱教育）
編一 P.159

石川稔(1997)：生活単元学習Q&A 月刊 実践障害児教育 Vol.290 学習研究社 P.15

高野信寛(1994)：生活単元学習の考え方 精神薄弱教育実践講座クロワール 第6巻「生活単元学習」 日本文教社 P.6

《参考文献》

文部省(1999)：盲学校、聾学校及び養護学校 幼稚部教育要領 小学部・中学部学習指導要領
高等部学習指導要領

文部省（1999）：中央教育審議会答申

文部省（1999）：教育課程審議会答申

文部省（1982）：肢体不自由の手引

鹿児島大学教育学部附属養護学校（1992）：「かかわり合いの豊かな子供を育てる教育課程の編成－生活単元学習の実践を通して－」研究紀要第8集

大分大学教育学部附属養護学校（1997）：障害児教育にチャレンジ⑩ 主体的に活動する子供を育てる支援の工夫 明治図書

吉田昌義 大南英明 監修（1996）：精神薄弱教育実践事例集第3集 生活単元学習－文部省実験・研究指定校をたずねて－ 大揚社

小出進責任編著 千葉大学教育学部附属養護学校（編）（1981）：生活単元学習－どの子も生き生きとする学校生活づくり－ 学習研究社

阿部芳久（1997）：障害児教育 授業の設計 日本文化科学社

清水貞夫（1997）：障害児教育における授業改善の技法 学苑社